

その夜、里見義豊は、稲村城下の玉首院でぼんやりと空を見上げていた。

「相変わらず小さい男だのう」

いつしか、妹・美が立っていた。

「白浜で知恵を盗むことも当主の道。自分の思い通りに運ばねば臍を曲げるのか？小さい、小さい」

「在地を掻き集めた馴れ合いなど、我が意と異なる。面白くない」

義豊には、ただ里見のみが突出した（一統）の支配という野望がある。この夢を成し遂げた大名となり、ゆくゆくは足利公方の副將軍として存分に働きたい。

これを壮大なことと云わずして、なんぞや。

所詮は美の言葉など、女の浅知恵。

明け透けのない詰りなど、聞く耳に値せぬ。

義豊はただただ、空を見上げるだけだった。

永正二十一年（一五二〇）六月二日、岡本左京亮通輔の水軍が海岸沿いに上総へ向けて発した。その直前、千葉氏領内に

「亥鼻へ里見が出城を築くものなり」

という噂が流れた。

これは、足利義明を通じて行われた攪乱の策である。

このことを、最初は千葉介昌胤も

「敵の乱波による攪乱か？」

と疑った。しかし、もともと里見には乱波がないことが公然の周知である。よもや出所は真里谷方あたりの、姑息なデマとも受け取っていた。

しかし、里見水軍出航の事実を知り、愕然となった。

「手勢を裂いて差し向けるべし」

矢継ぎ早に下知しながらも、出航の意図がまことに亥鼻出城の構築なのか、疑った。しかし、迷う余裕はなかった。方に一つのことを考慮し、昌胤は各城や砦から人を選った。

このとき千葉昌胤は、この水軍が壮大なる陽動であることに、まだ気付いていない。

里見の本隊は造海城まで海路を同行し、そこから水軍と別れて陸路を進んだ。この本隊の行動は、すっかり水軍に眩まされて千葉氏に察知されていない。

久留里城に入った里見本隊は、そこで真里谷勢の攪乱による陽動支援を経て、本佐倉城方面へと迫った。

六月一七日。

本佐倉城の出城となっている田井・横山・小沢要害を、里見勢は電撃的に襲撃し、その日のうちに陥落した。

突然の奇襲に、千葉昌胤は驚愕した。

「誰だ、海上よりの侵攻などと抜かした奴は！」

誰彼詰りつつも、急いで亥鼻方面の軍勢を呼び戻した。

が、里見勢は早くも本佐倉城下の田畑を焼討ちして和良比堀込城へと向かっていた。

急を聞いて駆けつけた庁南勢も、あとのまつりである。しかもその背後を真里谷勢に突かれたのである。結果、いつもとは逆に、撤退せざるを得なかった。

当初は里見に対し、真里谷信保は不愉快な念を傾けていた。

しかし、小弓城でこの策を献じた里見実堯は、信保を上手に持ち上げたのである。

「首尾よく出城を落としたら、それらは真里谷殿がよろしいように」

「本当によいのか？」

怪訝そうに真里谷信保は実堯をみた。

「安房と佐倉は遠きにござります。この長駆は公方のためのも。我らには他意がござりません」

そうまで云われて、厭な気になる者などいようか。

手を汚すことなく千葉側の砦を手に来るのである。こんな甘い話に乗らぬ手はない。

和良比堀込城に逃れた里見義通に対し、翌日、小弓公方・足利義明からの使者として逸見入道祥仙が訪れた。

「今度の働き、公方様も満足である」

と、足利義明からの感状が与えられた。

この感状は、和良比堀込城に里見勢がいることで、関宿の古河公方へも動揺を与えたことを喜ぶ内容である。

ややあつてのち、里見勢は帰国の途に就いた。

真里谷信保にとつて足利義明という存在は、当初、都合のいい傀儡公方であった。その才覚の片鱗も当初は見えず、ただ足利氏という血筋だけが取り柄の青二才であった。

しかし。

今回の本佐倉攻めの頃から、足利義明は、自分の意見というものを強く打ち出すようになっていた。これは、その威光で里見氏さえも長軀で用いることが出来るという、紛れもない自信の表れである。

ようは真里谷氏の客という肩身の狭さが、この頃にはすっかり一己の公方に変貌し、些かも遠慮がなくなつた、ということの意味する。

真里谷信保は表向きこそ

「頼もしゅうござります」

と口にしていたが、その内心は、苦々しく感じていた。

最近、義明は常陸国で勢力を広げつつある弟・基頼と連絡を密にしていた。基頼もまた、古河公方の方針に異を唱えて飛び出した者である。ただ義明と違う点は、己の覇権を求めなかつたところだ。古河公方に背くとともに義明に賛同し、協調する姿勢を保っていた。

このことは、真里谷信保の胸中を波立たせるに十分だった。

「さては、副将として小弓城へ迎え入れるおつもりか」

そんな噂さえあつた。

「誰のおかげで公方になれたものか、よくよく考えれば、真里谷家を無視できぬものを」

それでも時節を待って堪え忍ぶ真里谷信保という人物の器は、大したものであった。

上総国は表向き、大雑把に申せば千葉氏と小弓公方の睨み合いという構図であつた。が、な

かなかどうして。千葉氏と原氏が確執したように、小弓公方側にも、機微な不信が見え隠れしていたのである。

「いまは大切な御旗である。辛抱すれば、きつと報われる」

真里谷信保はそのように家臣を叱咤し、暴発を敵に慎んだ。

足利義明も同様である。

共通の敵がいる、そのことが、互いを許し合っていた。

十十十

下総の風（4）

夢酔 藤山